

津久井やまゆり園事件について その6

1) AHさん

「津久井やまゆり園に思うこと」

事件や犯人の事が、この1年半の中で色々語られているが、未だに議論されている。

答えがあるか解らないが、私たちが考え続ける事が風化させない、またこのような残虐な事件を起こさせない防止策になると考える。

多く語られているが、「人の命は他者によって選別、区別されるものではない」に尽きると思う。それ以上それ以下でも無い。これは誰もが知っている、理解しているけれども忘れ他者に対して選別、優越をつけてしまいここから、差別や虐待が始まる。絶対おこしてはいけないが、人は失敗や反省を繰り返す、その事によって学び生きていくものだと思う。犯人は、この残虐性から裁きを受けると思うが、裁きを受けると同時にしっかり、この罪を受け止め考え償って欲しい。

私は、働いている中で以前、利用者を叩いたことがあった。この時私は支援者ではなく、個としてその人と関わった気持ちでいたので、虐待だとは思わなかった。しかし心のどこかでは、もやもやした気持ちが付きまとっていた。

この事を、別の支援者と話した際「それは紛れもない虐待」と指摘され考えさせられた。おこしてしまったことは、けっして許されるものではないが、周りに話すことができ、互いが指摘し、受けとめる環境があったことによって、学び直すことができ勤め続けることができている。この犯人の周りもそのような環境だったら、大きな過ちを犯さず済んだのではと思う。

2) 手塚 玄

「事件の被告 植松聖について考えたこと」

あの事件からもうすぐ2年になる。このところあの事件のこと、裁判の経緯について、そもそも公判が始まったのかどうか、マスコミからは全く情報が届かない。この社会は結局そんなものなのかも知れない。でも事件の起きた年に兵庫のすばる福祉会が呼びかけた「津久井やまゆり園事件を考える会」はその後何度も集会を開催し、昨年からは「・・・考え続ける会」として参加団体も多くなり継続してこの事件に取り組み続けている。この7月には26日に追悼集会を、29日には講演とシンポジウムの開催を予定している。この国の福祉の在り方、社会そのものを問う事件としてまだまだ考えていかなければならないものと捉えている(連絡先 sugi808@infoseek.jp)。

また、マスコミでは全く取り上げられなくなったが、この事件を継続して取り上げ、拘留中の植松容疑者との面会を続けている雑誌を昨年末に知った。創出版の月刊誌「創(つくる)」。編集長篠田氏の植松との面会の記録、植松が篠田氏へ送った手記などが掲載されている。今年の春の号には獄中で植松が書いた漫画が2回にわたって掲載されていた。創の記事によると植松被告の主張は「心失者(植松の造語、心のない者・コミュニケーションできない者)は安楽死させるべき」と。そして家族には迷惑をかけたと謝罪したが、未だ殺人は間違っていたとは考えておらず被害者への謝罪はない。殺された方、傷を負った方がどんな人たちだったのか伏せられているので植松の信念通りの実行(植松言うところの“心失者”のみを狙った殺人)だったのかどうか判断できないが、もしその通りなら“障害者の否定”“優性思想による排除”と単純に決めつけることではないことになる。障害者全てを価値がないとは語っていないことになる。このことを見極める必要はあるように思い始めている。

植松の言うコミュニケーションとはどういう事だったのか。私たちは“重度身心身障害者”と呼ばれている人たちも豊かにコミュニケーションをとることができることを知っている。なぜ植松はこんな考えに至ったのか。自分がコミュニケーションをとれないだけ、又はとれないと思い込んでいるだけなのに、なぜその人たちを安楽死させるべき存在とまで考えたのか。そしてその考えをなぜ実行できたのか。やまゆり園では何を見て仕事をしていたのか。やまゆり園ではそんな植松にどんな指導をしたのか。指導以前に植松という人物にどんな接方をしていたのか。同僚は何を伝えたのか。そんな事を考え始めている。

津久井やまゆり園は事件後施設の再建を巡っていろいろな議論があった。同じ建物を再建する案に対しいろんな立場から異議があがった。入所施設はやめるべき、小規模な施設を複数建てるべき、グループホームに移行すべき等。また家族からは原則論ではなく今、この子たちの穏やかで安心した生活をこそ最優先で考えて欲しい、そんな生活に戻して欲しい、との家族として当然の切実な意見もあったと聞く。

この事件は植松聖が特殊な人物だったから起きた事件ではない。植松が上記のように考え、実行すること事を決断できた背景は間違いなくこの国の社会の中に存在する。

この国から、この社会から植松のような考えを持つものを生み出さない、福祉の場から植松のように考える人物を決して生み出さない、私の隣の人物がこんな考えをもつことを決して見逃さない。そんなことを考え始めている。